

**主 題： 忠実な管理者として生きる**

**聖書箇所： マタイの福音書 25章14－30節**

早いもので、今年度も終わりが近づいてきました。それぞれが学校や職場、家庭や教会などにあって、いろいろなことに追われて、日々が過ぎ去って行く中で、この朝は少し立ち止まって、皆さんと一つのことを見ていきたいと思えます。それは、タイトルにあるように「忠実な管理者として生きる」ということです。マタイ25：14－30のみことばを中心に学びますが、まず考えてください。神様を心から愛している人というのは、いったいどのような人物でしょう。間違いなく、これまで何度も聞いたことがあるでしょう。私たちが神様を心から愛することこそ、私たちひとりひとりにとって何よりも大切なことです。マタイ22：37－38で、イエス様ご自身がはっきりと述べられていました。「:37 そこで、イエスは彼に言われた。『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』:38 これがたいせつな第一の戒めです。」と。教会学校でも教えられるような内容なので、私たちはこの重要性をよく知っていますが、神様を心から愛している人物は、実際にどのような生き方をしている人なのでしょう。主に対する愛は、単なることばだけではなく、どのような姿や形でその人の歩みのうちに見られるのでしょうか。さまざまな答えを聖書から挙げることができます。

**●私たちの主への愛：**

**▶みことばと向き合う姿**

私たちの主への愛は、みことばと向き合う姿に現れました。救われて神様のすばらしさを知った者は、神様を愛するからこそ、聖書を通して、神様のことをもっと知りたいと望む者でした。愛と知識のつながりについて、パウロはピリピ1：9で、このように述べていました。「私は祈っています。あなたがたの愛が真の知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり、」と。

**▶主のことばに従い続ける姿**

また、私たちの主への愛は、主のことばに従い続ける姿にも現れました。本当に救われた者は、主を愛するからこそ、みことばに従順に従いたいと望むのです。イエス様もヨハネ14：15でこう言われました。「もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。」と。

**▶ほかの信仰者を愛する姿**

また、私たちの主への愛は、ほかの信仰者を愛する姿にも現れました。イエス様を信じて救われた者は、神様を愛しているからこそ、同じ神様から生まれた兄弟姉妹をも愛そうとする者でした。Iヨハネ5：1に、こう書かれています。「イエスがキリストであると信じる者はだれでも、神によって生まれたのです。生んでくださった方を愛する者はだれでも、その方によって生まれた者をも愛します。」と。

これだけを見ても、私たちの主に対する愛は、単なる感情や気持ちではなく、自分からは何もしないような受身的なものでもなく、私たちのうちに主にある喜び、主にある従順を生み出すものだとわかります。神様を心から愛する者は、神様のことにに関して、どのような時でも積極的であろうとする者でした。そのような積極的な愛が、大きく試される部分がほかにもありました。それこそが、今回、一緒に考えたい「管理者としての生き方」でした。

これからみことばを通して一緒に考えていきますが、先に言っておきます。神様は、数えきれないほど多くのものを、今私たちの手にゆだねてくださっています。本来なら決して値しない恵みによる特権や恵みによる財産を私たちに与えてくださっています。私たちが神様を心から愛しているなら、その愛は、自分たちに託され、任されているものを、どのように扱うのかに表れるわけです。私たちが良い管理者として、恵み深い主から与えられているものを、どのように忠実に使い、主の栄光を現わしていくのが、

とても大切なことでした。それが実際、具体的にどのような生き方なのか、みことばから考えましょう。特に今回の箇所から、忠実な管理者として生きていくために私たちが覚えておくべき四つの原則を見ていきます。順に見ながら、改めて自分の歩みを振り返ってみましょう。

その前に、一点だけ大切なことを覚えておいてください。これから見ていくマタイ25章のことばは、地上での時間があとわずかに迫っていたイエス様が、オリブ山で弟子たちに話されたことばでした。イエス様はこれまでに、ご自分が十字架にかかること、十字架で死んだ後によみがえること、その後、天に帰ること、そして、いつかまた地上に帰ってくるということを、何度も明らかにしていました。それは将来、必ず起こるのだとイエス様は弟子たちに明らかにしておられたのです。ご自身が救い主としての働きを終え、勝利者として、王として戻ってくる日が必ず来ると明らかにしていました。

しかし、そんなイエス様にも、まだわからないことがありました。それは、ご自分がいつ帰ってくるのかということです。それが、今から見ようとしているマタイ25章と、その前の24章で扱われていた大きなテーマでした。また、それに加えて、イエス様が再び来るまでの間、どのように生きていくべきなのかを弟子たちに教えようとされていました。

マタイ24:42-44に「:42 だから、目をさましていなさい。あなたがたは、自分の主がいつ来られるか、知らないからです。:43 しかし、このことは知っておきなさい。家の主人は、どろぼうが夜の何時に来ると知っていたら、目を見張っていたでしょうし、また、おめおめと自分の家に押し入れられはしなかったでしょう。:44 だから、あなたがたも用心していなさい。なぜなら、人の子は、思いがけない時に来るのですから。」とあります。家に押し入るどろぼうが、いつ来るのかを知っている人がいないように、主が来られるその日がいつかを知っている人はいません。しかし、イエス様はその日が必ず来ると言われていました。ですから、その日が来るまで、すべての人が注意深く備えている必要がありました。必ずやってくるその日まで、私たちは実際にどのように生きていくべきなのか、それが今回のみことばの背後にある重要なポイントです。私たちもみな、イエス様が帰ってくるのを待っています。それまでの間に何をすべきなのか、イエス様が教える大切な内容に心を留めながら、みことばを見ていきましょう。

### マタイ 25:14-30

「:14 天の御国は、しもべたちを呼んで、自分の財産を預け、旅に出て行く人のようです。:15 彼は、おのおのその能力に応じて、ひとりには五タラント、ひとりには二タラント、もうひとりには一タラントを渡し、それから旅に出かけた。:16 五タラント預かった者は、すぐに行って、それで商売をして、さらに五タラントもうけた。:17 同様に、二タラント預かった者も、さらに二タラントもうけた。:18 ところが、一タラント預かった者は、出て行くと、地を掘って、その主人の金を隠した。:19 さて、よほどたってから、しもべたちの主人が帰って来て、彼らと清算をした。:20 すると、五タラント預かった者が来て、もう五タラント差し出して言った。『ご主人さま。私に五タラント預けてくださいましたが、ご覧ください。私はさらに五タラントもうけました。』:21 その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』:22 二タラントの者も来て言った。『ご主人さま。私は二タラント預かりましたが、ご覧ください。さらに二タラントもうけました。』:23 その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』:24 ところが、一タラント預かっていた者も来て、言った。『ご主人さま。あなたは、蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めるひどい方だとわかっていました。:25 私はこわくなり、出て行って、あなたの一タラントを地の中に隠しておきました。さあどうぞ、これがあなたの物です。』:26 ところが、主人は彼に答えて言った。『悪いなまけ者のしもべだ。私が蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めることを知っていたというのか。:27 だったら、おまえはその私の金を、銀行に預けておくべきだった。そうすれば私は帰って来たときに、利息がついて返してもらえたのだ。:28 だから、そのタラントを彼から取

り上げて、それを十タラント持っている者にやりなさい。』:29 だれでも持っている者は、与えられて豊かになり、持たない者は、持っているものまでも取り上げられるのです。:30 役に立たぬしもべは、外の暗やみに追い出しなさい。そこで泣いて歯ぎしりするのです。

## ○忠実な管理者として生きるために：覚えておくべき四つの原則

### 1. 自分の立場を覚えていること 14節

忠実な管理者として生きるために覚えておくべき一つ目の原則は、自分の立場を覚えていることです。主から託されているものを正しく扱おうとするなら、まず、自分が主の前に何者なのかということを知り、正しく覚えていることが欠かせないのです。14節には2種類の人物が登場しています。「天の御国は、しもべたちを呼んで、自分の財産を預け、旅に出て行く人のようです。」とありますが、だれとだれが出てきていますか。財産を預けて旅に出る人と、そのしもべたちでした。

#### ▶「財産を預けて旅に出る人」

ここで「自分の財産を預け、旅に出る人」とは、だれのことでしょう。これはイエス様のことです。一度、地上に来られ、天に昇られた御子は、再び帰ってこられるすべての者の主人でした。ここでの「旅」ということばですが、だれかがどこかに出かけて行き、その場所に住み着いてしまうなら、旅とは言いません。単なる引っ越しです。イエス様は、確かに天に一度戻られました。しかし、永遠にそこにとどまるためではありません。この方は、現在も、再び帰ってくる長旅の途中にあります。今の地上を留守にしている時間は永遠ではなく、一時的なものです。イエス様はいなくなってしまったのではなく、いつか帰ってこられる主人なのです。この方こそ、罪と死に勝利された偉大な主人——イエス様でした。

#### ▶「しもべたち」(デューロス)

財産を預けて旅に出るのがイエス様だとしたら、もう一つの「しもべたち」とはだれのことでしょう。これは、イエス・キリストを信じていると告白する者たちのことでした。聖書の真理を受け入れ、神様を愛していると口にしている者たちでした。ただし、あとで詳しく見ていきますが、聖書は、このようにイエスを信じていると告白する者たちの中に、実は、二つのグループがいると教えています。一つは永遠に主人と喜びをともにする忠実な本当のしもべで、もう一つは、永遠に主人から引き離される悪いしもべ、本当は信仰を持っていないしもべです。イエスを信じると告白していても、その人の生き方が否定していることがあると聖書は繰り返し教えています。この点については、あとでまた考えるとして、ここでの「しもべたち」とは、先ほど言ったとおり、主人であるイエス様のことを愛しているしもべのことです。

今私たちは二つの登場人物を見ましたが、果たして私たちは、みことばが描いている関係性や立場を正しく覚えているのでしょうか。イエス様が主人であり自分はそのしもべであると、本当に認めているのでしょうか。

注目してほしいのは、ここで「しもべ」と訳されていることばです。これは、ギリシャ語の「デューロス」が使われていました。このことばは、もともと「縛る」という意味から派生して、主人に結びついたしもべ、もしくは完全に服従する奴隷という形で用いられました。奴隷は主人に縛りついている、結びついている状態で、完全に主人に服従する存在だということです。言い換えると、奴隷は「自分」を持っている存在ではありません。自分の意志や考えも持っていません。自分の時間や持ち物もありません。自分のいのちでさえも主人のものでした。

ひとりのローマ人作家もこのようなことばを残しています。「主人が奴隷に対して行うことは、それが不当であれ、怒りによるものであれ、自発的であれ、不本意であれ、不注意であれ、熟考の末であれ、意図的であれ、無意識であれ、すべてが裁きであり、正義であり、法なのです。」と。現在の私たちには考えにくいですが、当時の情景が描かれています。主人が奴隷に対してすることは何でも認められていました。奴隷は完全に主人の持ち物だからです。奴隷は自分自身では何も持たず、奴隷が持っているものはすべて主人に属するものでした。それこそが、私たちとイエス様の関係でもあるということです。忘れて

はいけません。イエス様が主人であり、私たちはしもべでした。私たちは主人であるイエス様の所有物でした。日々の生活の中で私たちはいろいろなものを手にしますが、私のものと言えるものは、一つもありません。いろいろなものを楽しみますが、自分の思いのままにできるものは、本来なら何ともありません。私たちが手にするものは、どれをとっても主人であるイエス様の所有物でした。本当にこのことを信じているでしょうか。日々の生活を送る中で、イエス様が主人で自分がしもべであると覚えているでしょうか。それとも、まるで自分が主人であるかのように生きてはいないでしょうか。

かつての信仰の勇者たちは、この事実を自分のこととして信じていました。たとえばパウロやテモテもピリピ 1 : 1 でこのように述べていました。「キリスト・イエスのしもべ（奴隷）であるパウロとテモテから、……」と。ペテロも同じです。Ⅱペテロ 1 : 1 でこのように挨拶していました。「イエス・キリストのしもべ（奴隷）であり使徒であるシモン・ペテロから、……」と。ヤコブも同じようにヤコブ 1 : 1 で「神と主イエス・キリストのしもべ（奴隷）ヤコブが、……」と。またユダも、ユダ 1 で「イエス・キリストのしもべ（奴隷）であり、ヤコブの兄弟であるユダから、……」と。彼らはみな、わかっていました。もはや自分は自分のものではなく、主人であるイエス様のものであると認めていました。その立場を認めていたからこそ彼らは文字どおり、しもべとしてイエス様のためにすべてを捨てて歩んで行こうとしました。パウロやペテロが、自分たちはいつも主のしもべであると告白していました。私たちは自分のことを何と言うでしょう。もし、イエス・キリストを信じて救われているのであれば、私たちは例外なく、罪の奴隷から主の奴隷へと変えられたものです。感謝なことに、罪の中で死に、罪に従っていた者が、キリストの血で買い取られ主の奴隷となりました。私たちには何もできなかったことを、主が血潮をもって買い取ってくださいました。自分のためにではなく、すばらしい救い主のために生きていく者へと変えられました。Ⅰコリント 6 : 19 - 20 にすばらしい感謝が書かれています。「:19 あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。:20 あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現しなさい。」と。私たちは代価を払って買い取られた者として生きていくことができます。その生き方は私たちにとって退屈で窮屈なものでしょうか。主の奴隷として生きていくことは、苦痛だけが伴うものでしょうか。いいえ、それこそが永遠の喜びをもたらすことを私たちはよく知っています。

黙示録 22 章には、主を信じる者に最後に待っている約束が記されています。新しくされた天と地にあって、イエス様によって買い取られた者が味わうことができる最高の祝福です。黙示録 22 : 3 - 5 に「:3 もはや、のろわれるものは何もない。神と小羊との御座が都の中にあって、そのしもべたちは神に仕え、:4 神の御顔を仰ぎ見る。また、彼らの額には神の名がついている。:5 もはや夜がない。神である主が彼らを照らされるので、彼らにはともしびの光も太陽の光もいらぬ。彼らは永遠に王である。」と。主の奴隷、主のしもべが、愛する主の御顔を仰ぎ見る日がやってくるということです。光である主とともに、主をほめたたえながら、主とともに王として君臨し続ける日がやってくるということです。何も持たないしもべが、ただ主にあって、主とともに最高の喜びにあずかることができるということです。それがしもべの立場でした。私たちが正しく覚えているでしょうか。奴隷は主人の完全な所有物であり、主人のために存在し、いのちさえも主人のものでした。自分のものを何も持っていないのが奴隷でした。

しかし、それは同時に、主の奴隷であるなら、何にも優る主ご自身とつながっている者であるということでした。その立場を覚えて、主人から託されているものを忠実に扱うこと、それがしもべである私たちに与えられている大切な責任でした。忠実な管理者として生きていこうとするなら、スタートラインは常にここにあることを覚えていてください。神の前に自分が何者かということ覚え続けていることです。これを忘れると管理者として生きていくことはできません。まずこれが大切な一つ目の原則でした。

## 2. 主からの信頼を覚えていること 14 - 15 節

次に、忠実な管理者として生きるために覚えておくべき二つ目の原則は、主からの信頼を覚えている

ことです。主から託されているものを正しく扱うには、奴隷である私たちを主がどのように扱ってくださるのかを覚えておく必要があります。マタイ25章に戻ってください。14-15節に「:14 天の御国は、しもべたちを呼んで、自分の財産を預け、旅に出て行く人のようです。:15 彼は、おのおのその能力に応じて、ひとりには五タラント、ひとりには二タラント、もうひとりには一タラントを渡し、それから旅に出かけた。」とあります。あまりにも馴染みのあるストーリーなので、サッと読み飛ばしてしまうかもしれませんが、今読んだ中には、すごいことが記されていました。改めてこの場面を思い浮かべてください。旅に出て行く主人は、ある時しもべたちを呼んで、それぞれに自分の財産を預けていました。いったいどれぐらいの財産を預けていたでしょう。ひとりには5タラント、ひとりには2タラント、またひとりには1タラントを預けていました。私は幼い時、聖書物語の漫画を読むのが好きで、今でもよく覚えています。このタラントの話を描いた絵は、主人が小さな袋に入れてある数枚のコインをしもべたちに渡しているようなものでした。ですから、主人は旅に出る間のちょっとしたお小遣いをしもべに与えている程度なのかと思っていました。しかし、実際にみことばを見るとそうではありあせん。このタラントに関して聖書(第3版)の欄外に記されています。「一タラントは6千デナリ」と。2017年度版聖書の欄外にはさらに詳しく「一タラントは6千デナリに相当、1デナリは当時の一日分の労賃に相当」と書いてあります。計算すると、1タラントは約16年分の賃金でした。ある注解者は、これを現在のお金に換算すると、何千万とか何億という値段になるのではないかとも言われています。つまり、主人がしもべに託した財産は些細なものではなく、あまりにも多くのものでした。何も持っていない奴隷とは違い、主人はすべてのものの持ち主でした。主人だけが自分自身のものをどう扱うかの権利を持っていました。しもべが「これだけください」と求めたからではなく、主人がしもべを信頼して、自ら多くの財産を任せていたわけです。

#### ▶「預け」

14節に「自分の財産を預け、」ということばが出てきました。続きを見ると、帰ってきた主人に対してしもべが述べている20節では「ご主人さま。私に五タラント預けてくださいましたが、ご覧ください。……」とあり、22節にも「ご主人さま。私は二タラント預かりましたが、ご覧ください。……」と、「預ける」ということが何度も繰り返されていました。このことばは、もともと「何かを与える」と「横に、傍に寄る」ということばがくっついてできたものでした。与えるだけでなく、何かの横に、傍に寄るということばがくっついているので、単に何かを与える行為以上の意味を表わしています。そこにある近い関係を表わしていました。相手のことを信頼しているからこそ、自分の大切なものを預けようとするのです。単に「はい、どうぞ」と与えるものではなく、その人を信用し、信頼があるから、自分の大切なものを近寄って与えようとする姿が描かれていました。ここで主人としもべにあるのは、単なる責任ではありません。ここには個人的な信頼がありました。主人は支配する思いからではなく、しもべを愛する愛情をもって言われているのです。「私は今から旅に出ます。旅に出る間、私のものをあなたに預けて行きます。私がいないうち、私の代わりに責任をもって管理しなさい。」と。

ここで一つ覚えていてください。忠実な管理者として生きていくためには、自分に与えられているものが自分のものではないこと、それに加えて、自分に与えられているすべてのものが、自分を信頼して主が一時的に預けてくださっているものだとして覚えていることが重要で大切なことです。今私たちが手にしているものは偶然ではなく、主が個人的に私たちの手にゆだねてくださっているものです。それぞれにゆだねられているものは違います。私たち以上に私たちのことを知ってくださっている主は、それぞれの能力に応じて必要な分だけを与えてくださっています。決して間違ふことのないお方が、最もふさわしい形で、最もふさわしい量を与えてくださっています。問われるのは、与えられていないものを嘆くのではなく、信頼して任されているものを主のために喜んで用いているのかということです。比較するものはないのです。皆さんのために、皆さんの能力を知っていて、どのように使うのかを知っている良いお

方が、ひとりひとりに必要な分だけ与えてくださっています。ひとりひとりを信頼し、ひとりひとりの手に託してくださっています。主からの信頼に応えるために、忠実なしもべとして生きているのであれば、預かったものを大切に管理することはとても重要なことでした。

自分の歩みを振り返ってみてください。今自分に与えられているものをまるで自分の持ち物のように扱っていないでしょうか。本来与えられているものは主人のために用いるものでした。主人のために用いるように託されているものを、しもべである自分のために使うことに心を奪われていないでしょうか。日々与えられているすべてのものは、主が私を信頼して預けてくれているものなのだと感謝することができます。感謝しながら取り扱っているでしょうか。主人であるイエス様は、私たちひとりひとりがご自分が託したものに対して忠実であり続けることを求めておられます。いつか帰ってくる主人が、帰るその日まで、主の栄光のために積極的に用いることを求めておられます。そのような忠実な管理者として生きていくためには、主の前に自分が何者であるのかということをつも覚えていることが、まず欠かせません。また同時に、私たちのような者に示されている主の信頼を覚えて、感謝することも欠かせないことでした。それが大切な二つ目の原則でした。

ここまでの学びで、このような疑問を持つ人がおられるかもしれません。自分が奴隷として何も持っていないことはよくわかりました。自分が今与えられているものは、どれも主からのものであり、ただ主が信頼して託してくれていることもわかりました。では、具体的に私に託されているものは、どのようなものなのかと。そんな疑問を持っているのであれば、それはすばらしいことです。なぜなら、それが次に皆さんと考える三つ目の原則の内容だからです。今回は時間が足りないので次週に続きます。

皆さん、この一週間の宿題として、それぞれ次の問いを自分のこととしてよく考えてみてください。「主人であるイエス様は、どんな財産を自分に与えてくれているのだろうか」と。確実に言えることは、救われている者であれば、主の栄光を現わすために、主に似た者に変えられていくために必要なものは、すでに主から与えられているということです。それがどのようなものか、どのように考えるべきか、たとえを言えば、それは生まれ持った才能かもしれません。神様は、それぞれにいろいろな才能を与えています。またそれぞれが学んだ知識や経験かもしれません。音楽や語学に長けた人がいるかもしれませんし、機械に長けた人もいます。それは神様がそれぞれに違う才能を与えているからです。それを用いて神様の栄光を現わすために与えられています。神様は、いろいろなものを与えて、それらを神様の栄光のために用いることを望んでおられるのです。それ以外にも救われた時に与えられる霊的賜物もあります。教会の中で、ある者は教える賜物、ある者は勧めや分け与える賜物、みな違った賜物を持っています。なぜでしょう。それは違った賜物を用いて、神様の栄光を現わすためでした。また、私たちには家族や兄弟姉妹との関係も与えられています。それぞれの持つ関係性も違います。その関係の中にあって、神様の栄光を現わすことができるからです。日常生活の中で与えられているお金や時間も主から与えられているものです。それぞれに与えられているものも使い方も違います。それぞれが置かれている場所において、与えられているものを用いて、主の栄光を現わすためです。すべてのものが主から与えられています。

この点に関して、J・C・ライルも次のようなことばを残していました。一つの例として見てください。「まず第一に、このたとえから学ぶのは、信仰を告白するすべてのクリスチャンが神から何かを受けているということである。私たちは皆、神の「しもべ」であり、皆「タラント」をゆだねられている。神の栄光を現すために用い得るものは、すべてタラントである。私たちの賜物、影響力、財産、知識、健康、力、時間、感覚、理性、知性、記憶、愛情、教会の一員としての特権、聖書を持つという恵み——これらはすべてタラントである。これらはどこから来たのか。誰の手がこれらを与えたのか。なぜ私たちは今のようであるのか。なぜ地を這う虫ではないのか。これらすべての問いに対する答えは一つしかない。私たちの持つすべては神から貸し与えられたものである。私たちは神の管理者であり、神に対して負債を負っている者である。この思いを深く心に刻もう。」と。

自分自身を吟味する時に、よく考えてみてください。私たちが今持っているもので、これは自分のもの、自分が勝ち取ったものだと言えるものは何也不会あります。与えられているすべてのものは、恵み深い主が一時的に与えてくださっているもので、私たちはただ預かっているだけです。預かっているものを主のために用いるようにと信頼して任せてくださっているものです。私たちの神様への感謝が足りていないと思いませんか。管理者としてさまざまなことを感謝することができます。この一週間、自分自身のことを吟味していく中であって、自分自身が気づくことのできていないことがたくさん出てくると思います。だからこそ、ほかの兄弟姉妹と分かち合いながら話してみてください。どれほどすばらしいものが、すでに主から与えられているのかに気づかされたなら、主に感謝することができます。

しかし、感謝だけで終わってはいけません。心から神様を愛しているからこそ、預かっているものを忠実に用いながら、今週も主の栄光を現わす者として歩んで行きましょう。